



「草木奇品家雅見 卷之下」は、植木屋の所有する斑入り草木などの奇品を収録している。

これら百姓、町人階級の名は、彼らが書物でも著さない限り後世に残ることはなく、その意味で、増田金太が彼らの名と在所、功績を残したことは大きい。

植木屋(種樹家之部)の最後を締めるのは、東都青山権田原植木屋石井弥助の所有する「弥助出こうじ」であり、ヤブコウジの斑入りである。

後の研究家は、この一丁に記された「選者金太はこの弥助の末子にて、今なお、青山に居る。」により、増田繁亭金太郎の実父は石井弥助であり、幼年時に増田家に養子に入り、「草木奇品家雅見」を著した文政10年に石井弥助が存命だったことを知る。

増田家の先代も石井弥助も武蔵国久米村(埼玉県所沢市久米)に在所があり、時宗長久寺の壇信徒であった。

石井弥助は、長久寺に大岡雲峰と関根雲停並びにその門人絵師による天井絵を寄進し、これは現在も一部が現存する。

当時、大岡雲峰と関根雲停は、その画才が高く評価され、江戸各地の社寺に写実的な花鳥風月の天井絵などを多く残した。四谷の須賀神社や千駄ヶ谷八幡にも土地の有力者により寄進されている。

その土地の有力者とは、多くの場合、植木屋であった。何しろ、斑入りの一鉢に何両の値が付けられ、あるものは百両で取引されたのだから。(2008.2.3)

Copyright (C)2008 増田信敬 (masuda nobutaka) All rights reserved

{ [HYPERLINK "http://soumokukihinkagami.com/"](http://soumokukihinkagami.com/) }